

ボクシングとJ・ロンドン

辻井 榮 滋

I

「WBC世界バンタム級 葉師寺，防衛（5度目）に失敗 葉師寺が敗れたことで，日本のジムに所属する世界王者は WBC ジュニアバンタム級の川島郭志（ヨネクラ），同フライ級の勇利アルバチャコフ（協栄），世界ボクシング協会（WBA）ライト級のオルズバック・ナザロフ（協栄）の3人になった¹⁾」

筆者が本稿執筆中の現在（95年8月），日本における最も新しいプロボクシング世界チャンピオン構成は，上記の通りである。しかも，残った3人の世界チャンピオンのうち2人までが外国出身者であり，何とも寂しいかぎりのプロボクシング界の現況ではある。かつて，「ある意味では，一国のボクシングの盛衰は，国民の精神的な活気のパロメーターになる²⁾」と書いたことがあるが，たしかに，発展途上にあつてハングリーな一国の有りようは，そのままボクシング界にもストレートに反映されるし，その逆もまた真なりと言えよう。日本の場合もその例外ではあり得ず，発展途上にあつた1960年代から70年代初め頃までの活況は，まさに黄金時代であつた。にもかかわらず，高度経済成長によって急速に大量消費社会へと脱皮し，“1億総中流意識”に浸るようになった80年代後半から90年代初めの頃には，日本ボクシング界もそうした国情を反映するように，世界戦で黒星の山を築いていった。当時の新聞を読みかえしてみても，世界挑戦での連敗を伝える記事がいやに目につく。90年の1月には，ついに21連敗を喫してしまった。「ライバル同士の一騎打ちこそ格闘技のだいご味。近ごろのボクシング界はどうもその「好敵手」が見当たらない。（中略）飽食の時代は格闘技から若者を遠ざけた。ゴング前からの拍手喝さいの好カードを期待するのはもう無理なのか⁴⁾」といった，やる瀬なさをにじませた一種のあきらめムードが蔓延した。さらに，そうした活気のなさは，構造不況に喘ぐ今日まで尾を引いているのである。……

低迷するボクシング界——日本に限らず世界的にも——だが，このボクシングというスポーツにはつねに多くの作家が関心を寄せてきた。わが国では，立松和平をまっ先に挙げるのが順当だろう。自らボクシング・ジムに通う行動派作家である。また，吉村昭もこんな文章を残している。

かなり以前からボクシング観戦を好んでいた私は，あらためて，書くために勤めの帰りにボクシングの試合場にしばしば足を向け，専門的な知識を得る必要から解説書や雑誌を読みあさった。

高田馬場にある青木拳闘倶楽部を訪れて元ボクサーであるコーチの矢島壮吉氏とも識り合いになり，

氏からボクシング界の内情、ボクサーの私生活などの話を詳細にきいた。また、氏が引き合わせてくれた若いボクサーに試合中の心理状態、減量の苦しさなどについてもたずね、メモをとった。⁵⁾

そして「鉄橋」という96枚の作品を書いた。……

一方海外に目を向けると、もう枚挙にいとまがない。E・ヘミングウェイやN・メイラーの名前はすぐ思い浮かぶし、「W・C・ハインツとテッド・ホーランド、(中略)バッド・シュルバーク、アーウィン・ショー、ネルソン・アルgren、リング・ラードナー、ジェームズ・ファレル、ジョン・オハラ、ジャック・ロンドン⁶⁾」のほか、ピート・ハミル、クリス・ミード、レナード・ガードナー、ホセ・トーレス、そしてJ・C・オーツと、目白押しの状態でボクシングを題材にした仕事を残している。本稿では、このオーツが列挙した作家たちのうち最後のジャック・ロンドン(1876—1916)が、ボクシングとどんなにかかわりを持ち、ボクシングに関するどんな仕事を残したのか、つまり、ボクシングの文脈でロンドンを捉えてみたい。

ロンドンは無類のスポーツ好きであった。H. Lachtman が編み“Selections from Jack London's Greatest Sports Writing”とサブタイトルを打った本には、15篇のフィクションや記事が収録されているが、めぼしいものを拾いあげると、サーフィン、ボクシング、釣り、ヨット乗り、徒歩競走、登山等である。このほかにも彼は、フェンシング、ライフル、水泳、馬術等々にも興じた。どれを取ってみても、今はやりのアウトドア・スポーツばかりである。これほど多種多様な関心を示したとあれば、大よその察しがつく通り、

A man of energy and diversity, London was certainly more of a “jack-of-all-sports” than a master of any one in particular.⁸⁾

つまり、「何でも来いに名人なし」だったわけだ。にもかかわらず、好奇心・行動力・研究心が旺盛だった彼は、そうした経験と筆力にものをいわせて、上記の例に見られるような秀逸な文章や作品をいくつも残した。ボクシングに関する仕事も、そんな無類のスポーツ好きから生じた大きな成果の1つだったのである。

II

J・ロンドンとボクシングのかかわりを追う前に、まずボクシングそのものを正面に据え、いくつかの点について整理をしておきたい。

第1点めに、ボクシングは「拳ひとつの原初的なスポーツ⁹⁾」である。筆者も以前に、

これほど古くからあるスポーツも少ない。その起源は、地上に人類が登場する時代にまでさかのぼる、と言っても過言ではない。まだ槍も鉄砲もなかった頃、襲いくる敵と戦うには、頑丈な身体と強い腕力とが何にもまして必要であったことは、想像に難くない。素手で殴りあって、相手を倒し、その力を誇示したことも再々あっただろう。¹⁰⁾

と書いたことがあるが、そんな大昔にあってはおよそスポーツとは呼びがたいが、「剣闘士によるボクシングの起源は、明確にギリシアに見てとれる¹¹⁾」というから、いずれにしてもきわめて長い歴史を刻んできたスポーツには違いない。時代が下って、20フィート（約6メートル）四方のスマートなリング内で戦う選手が身に着けているものといえば、マウスピースとグローブとトラックスと靴下とシューズだけである。「拳と知恵だけを武器に、一対一で闘う男たちは、すべて同時代人、兄弟であり、どんな歴史的時間にも属さない¹²⁾」わけで、これほど露骨に極限状況に立ち向かうスポーツはおそらくほかにあるまい。

人は極限状況が好きなのである。極限のなかの極限は戦争だが、死をやりとりするのは恐ろしいので、戦争は嫌いだ。人は戦争の次にスポーツを発明した。スポーツは戦争の代理なのかもしれない¹³⁾。

と立松は書いているが、その最たるシーンがノックアウトである。しかも、ノックアウトのあとには、時として死が待ちうけている場合もあるのだ。ロンドン自身は、“We like fighting — it's our nature.”¹¹⁾と書き、また“Pugilism is an Instinctive Passion of Our Race.”¹⁵⁾とも書いてはいるが、けんかや殴りあいは何も彼の人種だけのおはこではなく、「生身の間臭い、ケンカがいい。呼吸や熱気が入り乱れ、汗が飛んだり、痛みが伝わってくるケンカが見たいのだ¹⁶⁾」という立松の言葉を借りれば、むしろ人類が共通して求める格闘技ということになるだろう。

次に、ボクシングの歴史的流れをかいつまんでおきたい。近代的なルールが採用されるようになるまでは、圧倒的に長期間にわたりベアナックル、すなわち素手による殴りあいが通常であった。そして、ロンドン・プライズ・リングのルールが適用されていた18世紀末頃まででも、なお

血まみれの闘いとなり、選手はグローブをつけずに最後までとことん闘った。両者の膝がグランドについたときそのラウンドは終了し、どちらかのボクサーがつぎのラウンドに進めなくなるまで試合は続行された¹⁷⁾。

という。世界ヘビー級選手権試合が最初に行なわれたのは、1860年4月17日、イギリスにおいてであり、この時には第37ラウンド引き分けに終わっている。やがてボクシングの舞台はアメリカに移り、1882年、ジョン・L・サリヴァンがヘビー級チャンピオンとなって、アメリカにボクシングの新風を吹きこんだ。彼は、以後10年間チャンピオンの座にとどまり、ボクシングの振興・普及に多大の貢献をした。その頃、新聞や雑誌の購読者の数が増えたことも、ボクシングを普及させた。「1870年から1900年までに新聞の数は387紙から2326紙にふえ、全購読者数は350万人から1500万人にふえた¹⁸⁾」というから、驚異的な数字である。徐々にボクシング熱は浸透するようになり、20世紀に入り、1910年代には一般大衆がボクシングに大いに関心を抱くようになっていた。

このように、ロンドンが育ち、作家として成功を収め、観戦記を書いた時代は、奇しくも現代ボクシングの黎明期にあたる。今日行なわれている近代的でスマートな、別の見方をすればやや小振りで野性味の乏しいボクシングとはかなり異なるボクシングを、彼と彼の時代の人々は観戦していたわけである。選手の戦うラウンド数の多さはその最も顕著なもので、ネルスン対ギャンズ戦が42ラウンドだったこと¹⁹⁾、動員観客数にしても“from 15,000 to 20,000 men, paying each

from \$ 10 to \$ 50 for a seat²⁰⁾”と、ロンドン自身が明記しているあたりに、その辺の事情を読みとることができよう。

こうして1920年代へと移ると、拳聖と謳われたジャック・デンプシーの黄金時代となり、さらに1930年代後半からは、25度防衛（うち23 KO）し、12年間チャンピオンの座にあったジョウ・ルイス、とまさにカリスマ性を帯びた偉大なヘビー級チャンピオンが登場してくる。さらに、1944年9月29日からは、アメリカでテレビのボクシング番組が定期的に始まり²¹⁾、それ以降はさらに多くのファンを引き寄せて今日に至っている。

第3点めは、ボクシングにも人種——白人と黒人——問題が根強く絡んでいることである。換言すれば、「アメリカにおけるボクシング——^{ファイティング}闘い——の歴史は、アメリカにおける黒人の歴史と分かちがたく結びついている²²⁾」のである。

20世紀初頭の15年間において、人種差別や人種間の憎悪はアメリカ社会で激化の一途をたどり、ジョンソンはこの傾向を一気に悪化させてしまった²³⁾。

ジョンソンとは、1908年に黒人最初の世界ヘビー級王座に就いたジャック・ジョンソンのことで、彼はその傲慢性ゆえに、「黒人に対する悪い固定観念を植えつけ、人種差別に完璧な正当性をあたえてしまった²⁴⁾」という。とりわけ、ロンドン自身も記事を書いて大々的な触れこみを行なった白人挑戦者ジム・ジェフリーズとの一大決戦で、ジョンソンがタイトルを防衛してからというもの、人種暴動が多発していった。元来根強くあった人種差別の火にジョンソンが油を注いだ格好の20世紀初頭の15年間であったわけだが、作家としてのロンドンの諸活動も偶然この時期にちょうど重ねあわさっていたという事実も知っておく必要があるだろう。

第4点めとして、ボクシングのルールの大よその変容についても見ておきたい。すでに触れた通り、ずいぶんと長期間にわたって、いわば素手による殴りあい、ないしはそれに近い形での戦いが行なわれていたわけだが、英国で18世紀に初めてルール（7カ条）化された「ロンドン・プライズ・リングのルールでは許されていた取っ組みあい、反則行為、戦術のひき伸ばしなど²⁵⁾」きわめて雑なものであったにせよ、それでも近代スポーツとしてのボクシングの第1歩を踏みだした。やがて、今日行なわれているボクシングの礎となるマーキス・オブ・クィーンズベリー・ルールズ（Marquis of Queensberry rules）²⁶⁾が制定された。中でもベアナックルの禁止は、ボクシングが近代的なスポーツとして脱皮するうえで画期的なルールとなった。「1889年、第75ラウンドに彼（＝ジョン・L・サリヴァン）がジェイク・カーレインをKOした試合が、素手で闘った最後のヘビー級選手権試合となった²⁷⁾」から、現代ボクシングは1890年から始まったことになる。（ちなみに、J・ロンドンは当時14歳である。）

ボクシングの近代性は、フェア・ルールの有無にかかっていると思われるが、ロンドンもその記事の中で

Prize-fighting has rigid fair play rules. Foul blows are not permitted nor are big men allowed to fight with the little men.²⁸⁾

と書いている通り、近代性が問われれば問われるほどミス・マッチも避けられねばならない。J・C・オーツの言うように²⁹⁾、階級分けの目的はそのあたりにあったと考えられる。ボクシングの「主要な8階級が定まった」³⁰⁾のは1910年だが、「1階級の差は、想像以上に大きい」³¹⁾ようで、現在では16もの段階に分けられている。ところが、J・ロンドンがオーストラリアのシドニーで観戦したバーズ対ジョンソン戦についての³²⁾記事では、次のような文が目につく。

The men were so unevenly matched that Burns was barred from showing anything he had in him. …… Johnson was too big, too strong, too clever. (p.260)

Johnson was just as inaccessible as Mont Blanc, and against such a mountain what possible chance had Burns to extend himself? (p.262)

Burns was a toy in his hands. (p.263)

両選手の体重・体格・力量の違いが顕著で、14ラウンドは戦ったもの、ミス・マッチであった様子が容易に想像できる。

さらには、マウスピースにも触れておこう。ジョー・小泉によれば³³⁾、英国の歯科医ジャック・マークスが考案したもので、実用化されたのは1913年、アメリカでは1914年頃まではマウスピースを使用した例はなく、しかも使用禁止だったという。

ラウンドの数が少なくなったことも、近代ボクシングの特徴の1つである。現在、WBAタイトル・マッチが15回、WBCが12回と定めているが、最初の世界ヘビー級選手権試合でも紹介したように、「1892年から1915年までのマラソン・ファイトの時代には、なんと100ラウンド近くまで闘うことがよくあった。記録は、1893年の110ラウンドで、7時間以上もかかったというのだから、度肝を抜かれる」³⁴⁾。これも、J・ロンドンの生きた時代と重なりあう。20ラウンドや30ラウンドやるのは決して珍しいことではなかったというのだから、今日とはまさに隔世の感がある。

クィーンズベリー・ルールに導入されたもので重要なものといえば、レフェリーの登場である。J・ロンドンも、このレフェリーについて書き残している。

A third man will be in the ring with them to see that all the rules are observed. He is the referee. His word is law. Whatever he says must be obeyed. If a man strikes a foul blow, the referee will immediately disqualify him and award the victory to the other man. …… (p.277)

今日ではごく当然のこのように思われるレフェリーの役割・権威についてかなり詳細に語っているところがなぜか目新しく感じとれるのは、これまで見てきた時代のなせる業であろうか。

第5点めに、ボクシングは危険きわまりないものだから、違法であるとか廃止すべし、との相応の論議を呼んできたことについても取りあげておかねばならない。たとえば、

19世紀から20世紀にかけての多くのボクサーがそうだったように、ブラックバーンもほとんど食うや食わずの生活だった。その頃協会に加盟しているほとんどの州が賞金試合を禁止していて、ボクサーはへんぴなところでこっそり試合をするか、地元の警察のお目こぼしを当てにするしか収入の道はなかった。³⁵⁾

とか「20世紀初頭のアメリカでは、ごく一部の州を除いてボクシングが禁止されていた。そこで、アスレチック・クラブやもぐり酒場などで試合が行われていた」といったあたりに、当時の状況を見てとることができる。「ごく一部の州」とは、カリフォルニアとネヴァダ³⁶⁾である。それでもたとえば、J・ロンドンも連載記事を書いた1910年7月4日のジム・ジェフリーズ対ジャック・ジョンソン戦は、サンフランシスコでの対戦が認められず、ネヴァダ州リーノウに変更された。また、J・ロンドン以後の1920年代においても、「多くの州で、アルコール同様、ボクシングも禁止されていた」という。³⁷⁾そうした論議は昔話にとどまらず、今日まで延々と尾を引いている。1984年12月には、アメリカ医師会がボクシングの廃止を呼びかける決議案すら可決しているからである。

なぜこのようにボクシングがアメリカ各地で違法と見なされたり、廃止論議の槍玉にあげられてきたのだろうか。時代や場所によってその反対理由は異なるだろうが、最も基本的には「1対1で殴り合う人間の姿は、ひじょうに心乱される³⁸⁾光景^{スペクタクル}である。なぜならば、それは、私たちの文明のタブーを犯すから」というものである。つまり、文明社会が進めば進むほど、ボクシングとの関係はますます相容れないもの、との見方である。だが、人間が大自然や野性味を加速度的に失いつつ、いや破壊しつつある今日、太古の呼び声に耳を傾けることのできる唯一のスポーツとも言えるわけで、だからこそボクシングは存続してきたのである。アメリカでは、「その暴力性が、宗教指導者たちの激怒を³⁹⁾かっ」て以来久しい。あるいは、「スポーツとしてのボクシングが、犯罪組織と密接に関連しているというのも、⁴⁰⁾反対」理由に挙げられている。さらに、J・ロンドンの時代に焦点を合わせれば、

当時のボクシングの「危険」は——そして、不安になった市民が、ボクシング廃止を望んだ理由のひとつは——リング上で、白人をさらし者にし、辱めるのではないか、ということだった。ジョンソンが、挑戦者「白い希望」ジム・ジェフリーズに、決定的勝利をおさめた後、合衆国全域で、人種暴動が起こり、リンチが行われた。⁴¹⁾

といった人種問題と絡めた廃止論も忘れてはならない。

にもかかわらずJ・C・オーツは、「ボクシングは最も危険なスポーツではない」と切りだし、事例を引きながら以下のように続ける。

年間の死亡数では、ボクシングは、フットボール、サラブレッド・レース、カーレース、登山、その他2、3のスポーツの後に位置している。しかし、裸の拳で闘ったプライズファイティングの時代から、ボクシングは、人が憎みたがるスポーツだった。その人間対人間の闘いは、「文明化」された社会に同化されるには、あまりにもあからさまであり、⁴²⁾極端なのである。

と。ジョー・小泉も、「ボクシングは存続されるべきだと思う」と書き、J・C・オーツと同じ主張を展開している。「私は思う。“人間には表現，程度の違いこそあれ，潜在的な闘争本能がある”⁴³⁾と」

最後に、アメリカン・ドリームの一翼を担うものとしてのボクシングの存在意義も無視できない。強者に対する憧憬とビッグ・マネーを手に行けることに見る果てしない夢である。「強いものは美しい」は、一貫してアメリカの夢を支えてきた柱だし、収入となると、「トップボクサーがわずかひと晩のファイトで稼ぐ金額は、平均的なアメリカの労働者の年収よりも多い⁴⁴⁾」と言われる。中でも抜群の権威と人気を誇るヘビー級の世界チャンピオンとなれば、あらゆるスポーツの中でも桁はずれに高額——世界——である。1910年のジェフリーズ対ジョンソン戦は当時10万ドルだったし、最新の試合（1995年8月19日のラスベガスでのタイソンの再起第1戦、しかもノンタイトル）でも2,000万ドル（約20億円）という超破格のファイトマネーである。J・ロンドンも、1910年6月23日に書いている。“Why do men fight? Because of the money in it.” (p. 265) と。いかにもアメリカ人らしく、今も昔も不変の、的を射た直言というべきである。

ボクシングとJ・ロンドンとのかかわりや彼のボクシング観を考察するためには、今見たような今日とは異なる社会背景や諸事情をどうしても念頭に置いておく必要があるだろう。

III

J・ロンドンは子供の頃からけんか好き；闘士（fighter）であるべく定められていた、と言っても過言ではない。そうであらざるを得なかった、という言い方をしてもよい。I.O. エヴァンズは、次のように書いている。

JACK LONDON was forced to be a fighter even in his boyhood. It was not so much that he was naturally pugnacious as that the school that he attended in Oakland, California, had a tradition of toughness, which demanded that each of its boys should fight with every other boy. As Jack was, moreover, a shabbily-dressed illegitimate with a sensitive appearance and some nervous mannerisms, it would have gone very hard with him had he not been able to stand up for himself. At last, as was only natural, he came to take a pride in his prowess and enjoy a good scrap.⁴⁵⁾

生まれや生い立ちがジャック少年に及ぼした影響は、計り知れないものがあつたに違いない。その辺の事情は、特にこの引用の後半によく表われている。むしろ、けんかや殴りあいの連続または日々であったと考えられる。後年になっても、彼の略歴を見るだけで、争い・けんかにたびたび巻きこまれたことの見当はつく。たとえば、牡蠣の密漁群に加わったこと（15歳）、その翌年には逆に彼らを取り締まる密漁巡視官代理に任命されたこと、アザラシ狩りの船に乗り組んで7ヵ月間シベリア近海まで出かけたこと（17歳）、北米大陸放浪の旅（18歳）、クロンダイク地方のゴールドラッシュに加わったこと（21～22歳）等々、枚挙にいとまがないほどだ。具体的には、

彼の自伝的物語 *Martin Eden* (1909) や *John Barleycorn* (1913), あるいは *The Cruise of the Dazzler* (1902) や *Tales of the Fish Patrol* (1905) 等々に、実話や逸話として活写されている。そして、ボクシングとの関係から言えば、

Jack London responded, and said he would rather be the heavy-weight champion of the world than the King of England or the President of the United States. It had been his ambition when young, and was still so.⁴⁶⁾

と、彼自身が述べた通り、ボクシングには若い頃からかなりの興味・執着を抱いていた。また、単に観戦だけでなく、暇を見つけては実際に自らグローブを着けてボクシングに興じた。現に “I often put on gloves myself.” (p. 259) と記事に書いているし、証拠写真も何枚か残っている。親友ジョージ・スターリングに宛てた1905年5月2日付の手紙で、その様子的一端が読みとれる。シドニーからエクアドルに向かう汽船『タイメリック』号上でのことである。

Am boxing every day now — with the first, second and third mates — all husky young Englishmen. The First has a couple of beautiful black eyes I gave him. My straight left to the Second precipitated a gum-boil that raised his face four inches and kept him from boxing for a week. And the straight lefts I presented to the Third yesterday has swollen his nose to twice its normal size. O, I'm doing nicely, thank you. I've got two game thumbs, and my face has divers discolorations, and I get cramps in my legs while fighting — but I'm getting into condition.⁴⁷⁾

本格的と言おうか手加減をしないと言おうか、本人も相手をしている者たちもかなりのダメージを受けており、なまなましい臨場感が伝わってくる。ちなみに、ここには登場しないが、彼のお気に入りの相手は妻のチャーミアンであった。

J・ロンドンは、優れたボクシング観戦記をいくつも書き残したことで知られている。ここでは、事実のみを挙げるにとどめるが、彼の観戦記の中身を知るうえで最も充実したコレクションは、すでにいくつか例を引いている *Jack London Reports* である。この重宝な本には、主要な計4種類の記事が収められている。すなわち順に、①ジェフリーズ対ルプリン戦（1901年11月16日）、②ブリット対ネルスン戦（1905年9月10日）、③バーンズ対ジョンソン戦（1908年12月27日）、そして12回もの連載となった④ジェフリーズ対ジョンソン戦（1910年7月4日）である。①はまだ作家としてデビューして間もない頃の仕事で、“In one lucid interval I chanced to note that the crowd wanted blood more thirstily than did the two men in the ring.” (p. 250) といったあたりの文章は、当時の観衆が求めていたものを的確に捉えている。②は『サンフランシスコ・イグザミネー』紙から百ドルもらって書いたもので、この試合でも両選手は18ラウンドも戦った末にネルスンがノックアウト勝ちしている。また③はシドニーで行なわれた試合で、白人のトミー・バーンズと黒人のジャック・ジョンソンが世界ヘビー級を賭けて14ラウンド戦った。偶然シドニーに居合わせたロンドンは、この試合を観戦し、『オーストラリアン・スター』『ニューヨーク・

ヘラルド』両紙に③の記事を書き、後者からは275ドルを得ている。「チャーミアンは、この試合に顔を出す特別許可を与えられた——彼女は、2万人の観衆中ただ1人の女性であった⁴⁸⁾」などは、今日では考えられない当時のボクシング事情である。最後の④が白人のジェフリーズ対黒人チャンピオンのジョンソンの一対決に関するもので、6月23日から始まって毎日欠かさず7月4日の試合当日まで、トレーニング・キャンプ報告を含め両者のきわめて克明な分析を行なった12回に及ぶ連載記事である。まずは、6月23日のシリーズ最初の記事の冒頭第3節めを少し原文で引いてみよう。

Never in a war, at any one place, was congregated so large a number of writers and illustrators. When the Japanese threw 50,000 men across the Yalu into the teeth of the Russians on the Manchurian shore, on the walls of Wiju, but eleven correspondents looked on. …… here in Reno today were ten times that number of correspondents. (p. 264)

1904年に日露戦争の従軍記者としてさんざんな目にあいながら鴨緑江までたどり着いたときのこと、頭をよぎったのだろうか。戦争とボクシング、従軍記者と報道記者の対比がユニークで、この一戦に寄せられた周囲の期待がいかに大きなものであったかも推察できる。この時点ではジョンソンはまだリーノウ入りしていないが、6月25日のNo. 3では、さすが大のボクシング好きのロンドンも、恐れをなしたのか、“I should not like to be a sparring partner in Johnson's camp.” (p. 270)と書いているのが面白い。さらには、連載を通して両者の外観・性格等を対照的に描写している点が目につくが、その象徴的なものはNo. 7の“the silent fighter and the garrulous” (p. 281)、すなわち「寡黙なジェフリーズに対し饒舌なジョンソン」といった対比で、読者には明解である。また、7月4日当日に至るまで11回もかけて、次第にムードを盛り上げていく筆致も、ロンドンならではのものだ。たとえば、No. 8ではどんな試合になるかの予想を立てたり、7月に入るとこの試合を“the fight of the century” (p. 286)と位置づけ、

And so I say again to all you men who love the game, have the price, and are within striking distance of Reno — come. It is the fight of fights, the crowning fight of the whole ring, and perhaps the last great fight that will ever be held. Also, to you lovers of the game, who desire to see in flesh and blood the celebrities of the game, I say come. (p. 287)

と呼びかけ、大した触れこみをしている。読者の足が自ずと試合場へ向かいたくなるような書き方である。かといって、無論大々的な前宣伝・客集めだけではなく、No. 10のように“histology”（組織学）といった用語を持ちだし、生物の組織の構造・分化等にまで言及しながら、ボクシングに関する科学的論述を展開してみせてもいる。11回全体としては、7月4日の試合に向けてムードを盛り上げる効果大なるものがあると言えよう。そして、当日の観戦記となる。冒頭の白人——黒人の問題は次章に譲るとして、

What he failed to bring into the ring with him was his stamina, which he lost somewhere

in the last seven years. Jeff failed to come back. That is the whole story. (p.294)

と、ジェフリーズの敗戦を客観的に記し、あとはラウンドごとに生き生きとしたレポートを行なっている。最終ラウンドでは、

He who had never been knocked down was knocked down repeatedly. He who had never been knocked out was knocked out. Never mind the technical decision. Jeff was knocked out. (p.300)

と、ジョンソン勝利の事実を添えている。

このジェフリーズ対ジョンソン戦のレポートが、J・ロンドンのボクシング記事の中では量的には群を抜いて多く、内容も詳細である。もう1つ、ロスアンジェルス滞在中の1913年4月30日に、ダンディー対キルベイン戦を観戦し、翌日の『ロスアンジェルス・イグザミナー』紙に寄稿しており、筆者はその記事のコピーを所持している。見出しは“ORDINARY BOUT, SAYS JACK LONDON / DUNDEE IS NOT A CHAMPION”とあり、“YES, I saw the fight Tuesday night at the Vernon arena. It was a very ordinary sort of a fight. For featherweights it was an extraordinarily ordinary sort of a fight.”⁴⁹⁾の書きだしから始まる、全体的になかなか手厳しい調子の340語程度の記事である。ちなみに結果は、20ラウンド戦って、引き分けであった。

ロンドンが残したボクシング記事のほとんどに⁵⁰⁾目を通し、彼とボクシングのかかわりを追究してきたが、最後に彼のボクシングに対する基本姿勢をうかがわせる文を引いておこう。

Jack London loved the science of boxing where man is pitted against man. He hated bullfights where man's superior intellect destined the slaughter of the poor beast.⁵¹⁾

人間対人間が対等に戦うのではなく、人間の勝った知性が哀れな獣を殺戮するのに決まっている闘牛を嫌ったあたりに、ロンドンの人柄がにじみ出ているように思われる。

IV

第Ⅱ章でかなり立ち入って取りあげたこと——とりわけ白人と黒人の人種問題——とかわらせながら、本章ではJ・ロンドンの観戦記に彼の時代を読みたいと思う。Ⅱ章の背景と彼の観戦記とは、表裏一体をなすものだからである。

1908年12月26日、シドニーで行なわれた白人バーンズ対黒人ジョンソン戦の観戦記の中でロンドンは、

Personally I was with Burns all the way. He is a white man, and so am I. Naturally I wanted to see the white man win. (p.258)

とまで言いきっている。「個人的には」と断わりながらも、白人びいきを露骨に表明したものが、つねに個人の好みをあまり表に出さないことを美德としてきた日本人には直截に過ぎると映るだろう。ましてや今から90年近く前の発言である。しかし、押さえるべき要所は押さえ、この試合がジョンソンの一方的なものであったことを客観的にレポートしている。

There was no doubt, from the moment of the opening of the first round, the affair was too one-sided. There was never so one-sided a world's championship in the history of the ring. …… There was no fraction of a second in all fourteen rounds that could be called Burn's. (p. 261)

それから、「これまでにアメリカでおこなわれたどのスポーツイベントよりも注目を集めた⁵²⁾」と言われたこの一戦は、2万人の観衆を引き寄せた。これには、すでに見たロンドンの連載記事も大きく寄与したと思われる。“There is little doubt that in the history of the ring there was never a heavy-weight so well and symmetrically proportioned.” (p. 269) と、これほど釣りあいのよくとれたヘビー級の試合はないとの見方を示している一方で、決して差別発言なのではないが“two men, a white and a black” (p. 276) のように、両者の違いを誇張する言い方が時として目につく。そしてロンドンのこの試合の予想は、

… it will not be a short fight. There is practically no chance at all that it will be over within ten rounds. Twenty would be near the mark, though it may go thirty. Thirty-five rounds is the maximum I dare suggest, beyond which it is unthinkable that the contest can continue. (pp. 281-2)

と、かなり長引くとしている。30や35といったラウンド数まで記されているところが、当時のボクシングを如実に写しとっていて興味深い。最終の試合当日の記事は、“Once again has Johnson sent down to defeat the chosen representative of the white race, and this time the greatest of them all.” (p. 293) の書きだしで始まっている。“Once again” というのは、ジョンソンが1908年12月26日にシドニーで白人バーンズを破って以来のことを指している。さらには

And he played and fought a white man in a white man's country, before a white man's crowd. And the crowd was a Jeffries crowd. (p. 293)

と述べ、ジョンソンにしてみれば、まさに試合場にいる者全体を敵にまわしてのファイトであったことをうかがわせ、白人種対黒人種の対決構図で捉えていることは明白である。

… the great madness of applause went up when Jeffries entered the ring two minutes later. A quick superficial comparison between him and the negro would lead to a feeling of pity for the latter. (p. 296)

などは、そうした構図が浮き彫りにされた箇所であろう。ジョンソンにとっては分の悪いことばかりで、有利な条件など何1つ見あたらなかったのである。

にもかかわらず結果的には、「ジョンソンは第14ラウンドまで余裕たっぷりに試合をすすめ、第15ラウンドにジェフリイズをノックアウトした⁵³⁾」となり、ロンドンの筆の運び通りである。10ラウンド以内には終わらない、との彼の予想はずれはしなかったものの、20、30、最長35ラウンドまでは至らなかった。ともあれ、後半部の第1ラウンド以降各ラウンドの観戦記事は、きわめて客観性の高いレポートになっている。

人種差別の嵐が吹き荒れた今世紀初頭にたまたま生きあわせたJ・ロンドンに、白人対黒人の構図から抜けだし中立的な立場に徹するべきであった、というのはやさしい。だが、すでに見た時代状況・思潮を勘案したうえで正当な評価を下さなければならぬし、事実彼の観戦記は今日も十分に読むに耐えうる優れたものになっている。またジョンソンについては、その性格も災いして人種差別を増幅させたとしても、彼が「人種差別の犠牲者であったことは事実だ⁵⁴⁾」というのも忘れてはなるまい。逆に、ダンディー対キルペイン（白人対白人）戦の記事の締めくくりにロンドンが書いた、

And after all, it was not so bad to see Rome and Ireland battling healthily and wholesomely, in the true democracy of sport, wherein race prejudice absolutely did not exist, and wherein the only code was: “May the best man win.”⁵⁵⁾

のほうが、当時の思潮を逆照射し、同時にロンドンの人種観の限界をものぞかせる発言になってはいないだろうか。

時代が移って、1930年代後半から40年代のジョウ・ルイスの天下になっても、「白いアメリカで、黒い英雄であることは、簡単な仕事ではなかった⁵⁶⁾」というから、事は難しい。クリス・ミードは、「偏見をもたず、教養もあるこのニュー Yorker をもってしても、ルイスのトレーニングを見ると当時の圧倒的な偏見から逃れることはできなかった⁵⁷⁾」と前置きして、ポール・ギャリコの評を引いている。1935年当時のものである。

ルイスは堂々たる動物。うわべは礼儀正しい人間だが、動物のように食べ、眠り、闘う。動物のような黄褐色の肌、獲物を狙うときとおなじ集中力を身につけている。目、鼻、口、これらすべての突起物が獲物に向かっている。耳は危険を感じるために全神経が集中されている。飼育係は闘技場に連れて入ると、彼をなだめ、かわいがり、さすり、ささやき、そして解き放つ。鎖が解かれると、彼は闘う。古代ローマの闘技場で柵が取りはらわれ光のなかでしばし目をばちくりさせたあと、獲物に向かうライオンのように、彼は残忍そうに忍び寄るごとくコーナーからでてくる。（後略）⁵⁸⁾

ここには、黒人ボクサーの固定したイメージが読みとれる。現代作家N・メイラーでさえ、「大統領のための白書」の中で、黒人の払った高い代価について書いているし、ひいきの選手フロイド・パターソンに寄せる思いを吐露している。

作家としては後世評で命取りにもなりかねない時代状況のなか、J・ロンドンが残したボクシ

ング記事は、多少の問題点を含みながらもむしろフェアで、このスポーツの持つ醍醐味を十分に読者に伝えるものであると言えよう。

V

ボクシングの魅力は、息をもつかせぬ緊迫感にある。J・C・オーツは、他のスポーツには遊びはあっても、ボクシングには遊びはない、と明言する。いつ何が起きるかわからない。つねに死と向きあってもいて、目が離せない。J・ロンドンには、そんな緊迫感あふれるボクシングをこよなく愛した。その所産として、6種17篇の観戦記事、それに4篇のボクシング小説を残した。よほどの思い入れがあったのだろう。本稿では特に観戦記事を中心に、その中身を彼の生きた時代と結ぶ形で跡づけてみた。たかがボクシングされどボクシングで、すでに検証した通り、彼の観戦記からは19世紀末～20世紀初頭の社会思潮が垣間見えるし、逆に主としてⅡ章で見た時代の諸事情によって彼の観戦記事は裏打ちされた格好にもなっている。たしかにその記事は、良くも悪くもそうしたボクシング黎明期を感じさせてくれるものだが、一貫しているのは、白人選手をひいきし応援する立場はとって黒人選手の勝ち勝ちとし、レポートとしては公平かつ正確に判断をしている点である。好例を1つ挙げてみる。

There is no foolish sentimental need to gloss over Burn's defeat. Because a white man wishes a white man to win, this should not prevent him from giving absolute credit to the best man who did win, even when that best man was black. All hail to Johnson. His victory was unqualified. It was his fight all the way through, in spite of published accounts to the contrary, one of which out of the first six rounds gives two rounds to Burns, two to Johnson, and two with the honours evenly divided. In spite of much mistaken partisanship, it must be acknowledged by every man at the ringside that there was never a round that was Burn's and never a round with even honours. (p. 259)

白人をひいきすることとフェアなレポートをすることとを使い分けしている点に、諸々の時代の落差ないしは弱点を埋めてしまうほどの強みがあると思う。

「ボクシングにおいて“根性”“闘志”ほど重要なものはない⁵⁹⁾」と、ジョー・小泉は言う。これは、古今東西変わるものではあるまい。J・ロンドンは、幼少の頃から頻繁にけんかをしてきた。身を守るため、自分の信念を貫くため、正義のため、……原因はけんかの数だけあっただろう。いずれにせよ、泥だらけや血まみれになったそれらのけんかや殴りあいには、食うか食われるかの真剣勝負そのものであった。けんかそのものではないにせよ、職業作家として短篇が売れだしていく1899年頃までの数年間にわたる刻苦勉勵の修業期間もあった。そうした苦しい折々にはボクシングの“根性”や“闘志”が頭をもたげて発奮しただろうし、またボクシングの試合に関係した際には、そうした過去をダブらせていたに違いない。もし彼がふがいないボクシング界の現況を見たとしたら、何と言うであろうか。

注

- 1) 京都新聞, 1995年7月31日, p. 23.
- 2) 拙訳書『試合』（社会思想社・現代教養文庫, 1987）, p. 265.
- 3) 黄金時代を築いたあのファイティング原田と海老原博幸が, 東日本・新人王フライ級の決勝でぶつかったのが1960年12月24日のことで, やがて2人は世界の王者として輝かしい戦績を残すことになった。
- 4) 日本経済新聞, 1989年12月15日（タ）, p. 1.
- 5) 吉村昭『私の文学漂流』（新潮社, 1992）, p. 81.
- 6) Joyce Carol Oats, *On Boxing* (Dolphin / Doubleday, 1987) 邦訳は, 北代美和子訳『オン・ボクシング』（中央公論社, 1988）, p. 78.
- 7) *Sporting Blood*, edited Howard Lachtman (California : Presidio Press, 1981)
- 8) *Ibid.*, xii.
- 9) 立松和平『雨のボクシングジム』（〔1989〕, 東京書籍, 1990）, p. 110.
- 10) 上記拙訳書, pp. 263-4.
- 11) J・C・オーツ, 上掲書, p. 60.
- 12) 同上, p. 148.
- 13) 立松和平, 上掲書, p. 282.
- 14) *Jack London Reports*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York : Doubleday, 1970), p. 278.
- 15) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York : Crown Publishers, 1979), p. 225.
- 16) 立松和平『ボクシングは人生の御飯です』（光文社, 1986）, p. 25.
- 17) Chris Mead, *CHAMPION—Joe Louis* (Goodman Associates, 1985) 邦訳は, 佐藤恵一訳『チャンピオン—ジョー・ルイスの生涯』（東京書籍, 1988）, p. 22.
- 18) 同上, p. 19.
- 19) *Jack London Reports*, p. 275.
- 20) *Ibid.*, p. 277.
- 21) ジョー・小泉『ボクシングは科学だ』（〔1986〕, ベースボール・マガジン社, 1990）, pp. 88-9.
- 22) J・C・オーツ, 上掲書, p. 88.
- 23) クリス・ミード, 上掲書, p. 36.
- 24) 同上, 同ページ。
- 25) 同上, p. 24.
- 26) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』（小学館, 1994）によると, 「クイーンズベリー・ルール: 近代ボクシングの基本ルール; グローブの使用, 1ラウンド3分制, 10秒カウントでのノックアウト制などを規定している。〔1867年にこれらの制定を指示した第8代 *Marquis of Queensberry*, Sir Johns S. Douglas (1844-1900) の名にちなむ〕」とある。
- 27) クリス・ミード, 上掲書, pp. 24-5.
- 28) *Jack London Reports*, p. 292.
- 29) J・C・オーツ, 上掲書, p. 14.
- 30) ジョー・小泉, 上掲書, p. 26.
- 31) 山本茂『夢・敗れし者たちの』（徳間書店, 1986）, p. 51.
- 32) *Jack London Reports*, p. 260, p. 262, p. 263. 以下本書からの引用は, 引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 33) ジョー・小泉, 上掲書, pp. 21-2.
- 34) J・C・オーツ, 上掲書, p. 128.
- 35) クリス・ミード, 上掲書, p. 9.

- 36) 『月刊オーパス』（創現社出版，1991年8月号），p. 87.
- 37) J・C・オーツ，上掲書，p. 126.
- 38) 同上，p. 136.
- 39) クリス・ミード，上掲書，p. 23.
- 40) J・C・オーツ，上掲書，p. 122.
- 41) 同上，pp. 126-7.
- 42) 同上，p. 162.
- 43) ジョー・小泉，上掲書，p. 318.
- 44) クリス・ミード，上掲書，p. 17.
- 45) *The Game and The Abysmal Brute*, edited and introduced by I. O. Evans (London: Arco Publications, 1967), p. 7.
- 46) *The Referee*, Wednesday, January 6, 1909.
- 47) *The Letters of Jack London*, Vol. Two, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and Milo Shepard (Stanford University Press, 1988), p. 800.
- 48) Russ Kingman, *op. cit.*, p. 210. 邦訳は，拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』（本の友社，1989），p. 378.
- 49) *The Los Angeles Examiner*, May 1, 1913.
- 50) 故ラス・キングマンが残したメモ“JACK LONDON and BOXING”の「記事」の項によれば，計29篇が挙がっているが，日付を照合すれば2紙掲載で重複もあり，“Jack London on the Fights”（*Oakland Herald*, January 30, 1907）と“Pugilism is an Instinctive Passion of Our Race.”（*Pittsburg, Labor Tribune*, August 4, 1910）の2篇だけが，別のものである。ただし，後者は Russ Kingman, *op. cit.*, pp. 225-6（拙訳書，pp. 406-7）に採録されている。
- 51) 同じく故ラス・キングマンが残した“The Boxing World of Jack London”（1983）という6ページに及ぶ未刊の小論。
- 52) クリス・ミード，上掲書，p. 30.
- 53) 同上，同ページ。
- 54) 同上，p. 35.
- 55) *The Los Angeles Examiner*, May 1, 1913.
- 56) J・C・オーツ，上掲書，p. 117.
- 57) クリス・ミード，上掲書，p. 78.
- 58) 同上，同ページ。
- 59) ジョー・小泉，上掲書，p. 231.

(1995. 8. 30)